究極の agnihotra (1)

—— Vādhūla-Anvākhyāna II 13 ——

阪本（後藤）純子

1.　熱した牛乳を日没・日昇時に祭火に献ずる agnihotra は最も単純なシュラウタ祭式であるが，祭火設置者 (āhitāgni-) の生涯にわたる日々の義務でもある．同祭式は Ṛgveda に遡る古い要素に基づく一方，献供とその効果に関する考察を通じて，brāhmaṇa から upaniṣad にかけて，個人の輪廻と解脱を巡る思想展開に中核的役割を果たした[1]．黒 Yajurveda 古層では戦闘・略奪・遠征を本務とする王族に agnihotra が禁止・制限されるが[2]，王権の拡大とともに王族にも agnihotra が普及し，戦闘や遠征中にその供物が得られない場合が生ずる．この問題に関し Videha 国王 Janaka と Yājñavalkya (Vājasaneya) との対話が残されている．「agnihotra[3] とは何か」「牛乳である」という定説から出発して，「それが無い場合，何により献供するのか」という質問を繰返した後，「全く何も存在しなかった原初における献供」が明かされ，「究極の agnihotra」が教示される．これには4版があり，1) ŚB-M XI 3,1，ŚB-K III 1,4，JB I 19f. と 2) VādhAnv[4] II 13 に大別される．Janaka の対話相手は 1) では Yājñavalkya，2) では Vājasaneya (「adhvaryu 祭官」) と呼ばれる．1) では対話に2組の問答歌 (Śloka) が続く．

2.　第1群 (ŚB-M, ŚB-K, JB)[5] に関しては結論のみ要約する．Janaka との対話の最後に，Yājñavalkya は原初，何も地上に存在しなかった時，「真実 (satyá-) が信じる思い (śraddhā́-) にまさしく献供された (áhūyataivá; 注19)」と述べる．この返答の根底には，古い2神話の融合が窺われる：1. 火を創出した時，Prajāpati が自らの視力 (cákṣus-) ＝太陽＝真実 (satyá-) を火に献供 (最初の agnihotra: MS I 8,1: 115, 2–5 ～ KS VI 1:49,16)；2. 大洪水の後，Manu が水達 (一般に śraddhā́- と等置される) に乳製品を献供 (ŚB I 8,1,7)．具体的には「真実」(satyá-) は「祭詞」(yájus-) を指すと推定される：ŚB II 3,1,30 agnír jyótir jyótir agníḥ svā́héty. átha prātáḥ sū́ryo jyótir jyótiḥ sū́ryaḥ svā́héti. tát satyénaivá hūyate「[夕べには]『火が光である，光は火である，svāhā』と［唱える］．次に朝には『太陽が光である，光は太陽である，svāhā』と［唱える］．その事によって他ならぬ真実［である祭詞］により献供される事にな

る」．従って，「何も無い時，どのように agnihotra を献供するか」への最終解答は，自分の「信じる思い」に「真実である祭詞」を献ずる（唱えかける）ことになる．

続く 2 組の問答歌は，旅行中も思考（mánas-）が祭火設置者と祭火とを結び付け，思考を怠っている場合にも，彼の呼吸（prāṇá-）に留守宅での献供が献じられると説く．最後に「agnihotra とは呼吸（prāṇá-）である」という結論が述べらる．

このグループ内では ŚB-M → JB → ŚB-K という展開次第が跡づけられる．

3.　VādhAnv II 13 (II 10,1)：Ed. IKARI（電子版 2006）に基づく[6)]：

【導入部】idaṃ vā anvāhur. brahmavādino vadanty agnihotraprāyaṇā yajñāḥ=yajñānām（注 8）ity. ājyena juhuyāt tejaskāmasya. tejo vā ājyan. tejasvy eva bhavati. somena（注 9）brahmavarcasakāmasya. brahmavarcasaṃ（注10）vai somo. brahmavarcasy eva bhavati. payasā paśukāmasyai = grāmy eva bhavaty（注 15）．āpo vā agnihotran. tan nu hādbhir eva juhuyād. oṣadhayo ha vā agnihotran. tad u hauṣadhībhir eva juhuyād. vanaspatayo ha vā agnihotran. tad u ha vanaspatibhir eva juhuyāt. taṇḍulā vā agnihotran. tan nu ha taṇḍulair eva juhuyāt. taṇḍulahomaś cet tu na syād odanena juhuyād. eṣa vai homānāṃ sattamo yad odanahomaḥ. prajāyai vā etat. paśūnāṃ rūpaṃ yat payas. sa yasya ha payasā **juhvati**（Ed.=Mss.; 注 17）sākṣād eva prajāṃ paśūn avarunddhe.【対話】janako ha vaideho vājasaneyaṃ papraccha yan nv adhvaryo payo na syāt kenāgnihotrañ juhuyād ity. adbhis samrāḍ ity. atha yad āpo na syuḥ kenaivāgnihotrañ juhuyād ity. oṣadhībhis samrāḍ ity. atha yad oṣadhayo na syuḥ kenaivāgnihotrañ juhuyād iti. vanaspatibhis samrāḍ ity. atha yad vanaspatayo na syuḥ kenāgnihotrañ juhuyād iti. satā ca samrāḍ asatā cety. atha yat sac cāsac ca na syātāṃ kenaivāgnihotrañ juhuyād iti. om iti hovācā-. ₐtipaṇḍita eva **manyase**（注18）purā vāvaitasmāt sarvasmāj janitor athāgnihotram *__ahūyataiveti__（Ed.Mss. **ahūyata iveti**: 注 19,20）．tad vāva bhagavo +**vividuṣāṇīti**（全 Mss.; 全 Ed. **vividiṣāṇīti**; 注 21）. sa vai tarhītthan nedīyo nyāsarpeti. sa sannyāsasarpa. taṃ hovācā-, ₐ**ditya** eva samrāḍ agnau sāyam **ahūyetā-**（注 22），ₐgnir **āditye** prātas. tan nu ha sāyañ juhuyād agnir jyotir jyotir **agnāv**（注23）**ādityaṃ** svāhety. atha ha prātar juhuyāt **sūryo** jyotir jyotis **sūrye**（注 24）**’gniṃ** svāheti.【結論】tad etan na kuryād itarasmin vidyamāne. sa ya evaikavṛt suvargaṃ lokam **abhiṣyān**（注 25）na prajān na paśūn nāyur nemaṃ lokaṃ pratyavekṣeta.

【導入部】これ（直後の引用）に付随して[7)]［人々は］言っているのだ．［以下引用：］「ブラフマンを議論する者達は論じている，『諸祭式は agnihotra を始まりとする．{agnihotra は何を始まりとするか』と．『仔牛が agnihotra の始まりなのだ．agnihotra が} 諸祭式の［始まりである］』と」[8)]．「バター（ājya-）により［祭官は］献供すべきである，光熱力（威光：tejas-）を欲する［祭主］の［agnihotra を］．バターが光熱力（威光）なのだ．［その祭主は］まさしく光熱力（威光）により特徴づけられる者となる．ソーマ[9)]により［祭官は献供すべきである］，ブラフマン（実現力を持つ神聖な言葉：nt. bráhman-）の効力

(brahmavarcasa-)[10] を望む［祭主］の［agnihotra を］．ソーマがブラフマンの効力なのだ．［その祭主は］まさしくブラフマンの効力により特徴づけられる者となる．牛乳により家畜を欲する［祭主］の［agnihotra を祭官は献供すべきである］．{これが家畜達の姿なのだ．他ならぬ姿により彼（祭主）のために家畜達を囲い込む事になる．［祭主は］まさしく家畜に富む者となる．酸乳 (dádhi-)[11] により身体能力 (indriyá-) を望む［祭主］の［agnihotra を献供すべきである］．酸乳が身体能力なのだ．まさしく身体能力により特色づけられる者になる．穀物食 (yavāgū́-)[12] により人間集団 (grā́ma-)[13] を望む［祭主］の［agnihotra を献供すべきである］．人間達は植物達なのだ．他ならぬ分け前の分配により，彼（祭主）のために，(その集団内で) 共に生まれた人々を囲い込むことになる.} まさしく人間集団により特色づけられる者 (grāmín-)[14] になる」[15]．［以下 VādhAnv の見解：］水達が agnihotra (の供物；注 3) なのだ．そこで，今，つまり，他ならぬ水達により献供すべきである．草達が，つまり，agnihotra なのだ．そこで，また，つまり，他ならぬ草達により献供すべきである．木々が，つまり，agnihotra なのだ．そこで，また，つまり，他ならぬ木々により献供すべきである．玄米・玄麦達 (taṇḍula-)[16] が agnihotra なのだ．そこで，今，つまり，他ならぬ玄米・玄麦達により献供すべきである．しかしもし玄米・玄麦の供儀が無い場合には，粥 (odana-; 注 16) により献供すべきである．粥の供儀というもの，これは諸供儀の中で最善 (sattama-) なのだ．これは子孫達のためなのだ．牛乳というもの，これは家畜たちの姿である．［祭官達が］つまり，その［祭主］の［agnihotra を］牛乳により献供する (juhvati: Pl.)[17] ならば，彼（祭主）は子孫と家畜達とを目の当たりに自分のために囲い込むことになる．【対話】Videha の長 Janaka は **Vājasaneya** に質問した (Perf.)：「もし今，**adhvaryu** 祭官よ，牛乳が無ければ，何により agnihotra を献供すべきであろうか」と．「水達により，大王よ」と［V は答えた］．「それでは水達が無ければ，一体何により agnihotra を献供すべきであろうか」と．「草達により，大王よ」と．「それでは草達が無ければ，一体何により agnihotra を献供すべきであろうか」と．「木々により，大王よ」と．「それでは木々が無ければ，何により agnihotra を献供すべきであろうか」と．「存在するもの (＝祭詞：sat-) と，大王よ，存在しないもの (祭詞の非存在＝沈黙：asat-) とにより」と．「それでは存在するものも存在しないものも無ければ，一体何により agnihotra を献供すべきであろうか」と．「然り (om)」と［V は］言った，「まさしく賢すぎる者として，君は思っている (manyase)[18]，これらすべての誕生の以前に，その時 agnihotra がまさしく (eva) 献供された (ipf. ahūyata)[19] のだ［と］[20]」と．「それを，先生，私は知りたいと望むのです (**subj. desid. ⁺vividuṣāṇi**[21])」と［J は言った］．「そうであるならば (sa vai)［君］はそれではこのようにもっと近くにすり寄れ」と［V は言った］．その彼 (J) はすぐ近くにすり寄った．彼に［V は］言った：「他ならぬ太陽 (**āditya-**) が，大王よ，火に夕，献供されたようだ (**augm.** 付き **opt. ahūyeta**[22])．火が太陽に朝．そこで今，つま

り，夕，献供すべきである：『火が光である，光を火に (agnāv)[23]，［則ち］太陽を (ādityaṁ)，svāhā』と［唱えつつ］．他方，朝，献供すべきである：『太陽 (sūrya-) が光である，光を太陽に (sūrye)[24]，［則ち］火を，svāhā』と［唱えつつ］」［と］[25]．【結論】そのようにこれ［この agnihotra］を行うべきではない，ほかの［agnihotra］が存在する（見出される）ならば．［そのような agnihotra を行って］1 度（夕と朝で一組）で天界を越えるならば (abhiṣyāt)[26]，まさしくその者は，子孫も家畜も寿命もこの世も再び見ることはないであろう (pratyavekṣeta)．

4.　稀な，或いは崩れた語形が目立つ：augm. 付き opt. ahūyeta（注 22），desid. subj. vividuṣāṇi（注 21），ahūyata iva（注 19），abhiṣyāt（注 26）．一般的な過去に perf. が，太古の献供の神学的叙述に ipf. が用いられる点は VādhAnv I 1–2 に共通する[27]．

導入部では供物の種類と効果に関する伝統的議論を自派の TB から引用した後，独自に供物を列挙する．TB からの引用に，穀物祭である agnihotra とは無関係なソーマが挿入される事は，br. より新しい成立を示唆する（注 8, 15 参照）．供物の列挙が水から始まり，本来の牛乳で終わるのは異例である．他方，ŚB・JB の対話冒頭の問答「agnihotra（の供物）とは何か」「牛乳である」を対話部分に欠く．導入部が対話の内容を先取りし，対話に合わせて供物を並べ替えた疑いが強い．

Janaka と Vājasaneya の対話では，「供物が無い場合，どのように献供すべきか」という現実的問題から最後の秘密の教えに重点が移動している事が注目される．

供物の代替の順序は，【ŚB・JB】牛乳 → 米・麦 → 他の草達（JB: 他の穀物）→ 荒野に自生する草達 → 樹木に属するもの（果実，種子，葉，樹皮，根等：ŚB-M）・果実（ŚB-K）[JB 欠如] → 水達；【VādhAnv】牛乳 → 水達 → 草達 → 木々 → sat「存在するもの」と asat「存在しないもの」．導入部の供物の詳細な列挙（すべて食物）に比べ，対話では供物の種類，特に食物が少なく，ŚB の果実等の替わりに樹木そのもの（恐らく燃料）が挙げられる．また ŚB・JB では最後に位置する水達が牛乳の直後に来る．供物は基本的に食物であり，生存に不可欠な水は草木の無い状況でも必ず人間生活に伴う故に，VādhAnv よりも ŚB・JB の方が自然である．

「存在するもの・しないもの (sat, asat)」は謎めいた表現である．献供は供物と祭詞の 2 要素から成るが，最初は祭詞を唱え，次に祭詞を唱えずに計 2 回の献供を行う agnihotra の特徴から，sat- (nt.) は祭詞 yájus- (nt.)，asat- (nt.) は祭詞の非存在（沈黙）を意味すると解される．この「sat- と asat- による献供」は ŚB・JB の最後の答「satya- が献供された」，ŚB II 3,1,30 satyénaivá hūyate「ほかならぬ satya- (= 祭詞）により献供される」(→ 2.)，JB I 23 の Vājasaneya 説「satya- を satya- に献供

する」(→ 6.) から，最終解答 satya- を sat- と asat- とに改作したと推測される．

5.　Janaka は更に執拗に，祭詞を唱える者さえ無い生物発生以前の agnihotra を問う．遂に Vājasaneya は「夕べは太陽が火に献供され，朝は火が太陽に献供された」という秘密を明かすに至る．Vājasaneya が説く太古の agnihotra は，光を媒介とする太陽＝火の同置に基づき，日没・日昇という自然現象を宇宙規模の祭式として解釈したものである．出発点は br. 初期から見られる発想「光である太陽が火の中に入る結果，夜は火が光として輝く．光である火が太陽の中に入る結果，昼は太陽が光として輝く」にある：

1) MS I 5,5:73,11–13 [agnyupasthāna] ubháu hy ètáu sahā́-. ₐmúṃ vā́ ayám dívā bhūté prá viśati. tásmād asáu dívā rocata. imā́m asáu náktaṃ. tásmād ayáṃ náktam.「これら両名（Indra と Agni）は一緒に居るのであるから．あれ[28]（Indra＝太陽）にこれ（Agni）は入るのだ，昼になると．それ故にあれ（Indra＝太陽）は昼，輝く．この［大地］にあれ（Indra＝太陽）は夜［入る］．それ故にこれ（Agni）が夜［輝く］]」～ KS VII 4:66,1 [agnyupasthāna] sūryo vā indras. so ’gniṃ naktaṃ praviśaty.「太陽が Indra である．それが夜，火に入る」; 2) TB II 1,2,9f. agníṃ vā́vādityáḥ sāyáṃ práviśati. tásmād agnír dūrā́n naktáṃ dadr̥śe. ubhé hí téjasī sampádyete. || udyántaṃ vā́vādityám agnír ánusamārohati. tasmād dhūmá evā́gnér dívā dadr̥śe.「火に太陽（āditya-）は夕方，入るのだ．それ故，火は遠くから夜見られる．両方の光熱が合一しているから．昇りつつある太陽の後を追って共に火は昇るのだ．それ故，火の煙だけが昼間は見られる」; 3) KB II 8 sa vā eṣo ’gnir udyaty āditya ātmānaṃ juhoti. asāv astaṃ yant sāye ’gnāv (āditya: Ed. SARMA) ātmānaṃ juhoti. rātrir evāhan juhoty. aho rātrau. prāṇa evāpāne juhoty. apānaḥ prāṇe. tāni vā etāni ṣaḍ juhvaty anyonya ātmānam.「そのようなこの火は昇りつつある太陽（āditya-）に自らを献供する．あの（太陽）は沈みつつ，夕方，火に自らを献供する．他ならぬ夜が昼に［自らを］献供する．昼が夜に．他ならぬ呼気が吸気に［自らを］献供する．吸気が呼気に．そのようなこれら六つは相互の中に自らを献供しているのだ。」; 4) JB I 9 anyonyasmin evātmānaṃ juhavāveti | sa yad ādityo ’stam ety agnāv eva tad ātmānaṃ juhoti | … ādityam udyantam agnir anudeti | āditya eva tad ātmānaṃ juhoti「『まさしく互いに我々両名は自らを献供し合おう』と［太陽と火は言った］．そこで太陽（āditya-）が沈む時，他ならぬ火にその時自らを献供する．…昇りつつある太陽を追って火は昇る．他ならぬ太陽にその時自らを献供する」．

6.　この太古の agnihotra に基づき，特殊な祭詞を用いて，夕は火に太陽を，朝は太陽に火を献供する方法が Vājasaneya により指示される．しかしこの方法は Vājasaneyin 派の献供方式とは対立し，ŚB 古層で批判されており，同派の開祖 Vājasaneya が提唱するのは不自然である．ŚB/Vājasaneyin 派は，夜間，火の中に入って

いる胎児としての太陽[29]，ないし賓客としての víśve deváḥ（＝太陽光線）の滞在中に夕食と朝食を献ずるという解釈に立ち，日没後と日出前の献供を主張する（ŚB-M II 3,1,1ff.= ŚB-K I 3,1,1ff.）．他方，朝太陽に火を献ずる方式では，昇りつつある太陽に火＝光が入るという想定に基づくので（→ 5.），日の出後に献供する．その際，火と太陽の中，どちらにどちらを献供するか明示し混乱を避ける必要が生じる（混乱の実例 → 注 27）．それ故，従来の祭詞では正確に献供できないと批判する：

ŚB-M II 3,1,36（～ ŚB-K I 3,1,24f.[30]）tád āhuḥ | **agnā́v** evàitát sāyáṃ **sū́ryaṃ** juhoti. **sū́rye** prātár agním íti. tád vái tád uditahomínām evá. yadā́ hy èvá sū́ryo 'stám éty, áthāgnír jyótir. yadā́ sū́rya udéty, átha sū́ryo jyótir. nā̀sya sā́ paricakṣè-. ᵢyám evá paricakṣā́ yát tásyai nā̀ddhā́ devátāyai hūyáte yā̀gnihotrásya devátā-. ₐgnír jyótir jyótir agníḥ svā́héti. tátra **nā̀gnáye** svā́héty. átha prātáḥ sū́ryo jyótir jyótiḥ sū́ryaḥ svā́héti. tátra na **sū́ryāya** svā́héti ||「それに関して［人々は］言っている，『他ならぬ火にこのように夕方，太陽（sū́rya-）を献供する．太陽に朝，火を［献供する］』と．その場合，他ならぬ『日の出の後で献供する者（uditahomín-）達』のそれ（agnihotra）なのだ．まさしく太陽が沈むや否や，すると火が光である，まさしく太陽が昇るや否や，すると太陽が光であるから．それは彼（祭主）の過失ではない．agnihotra の神格であるところのその神格（火または太陽）に対して，明確に［祭官により］献供されないということ，これこそが過失である．『火が光である，光は火である，svā́hā』と［祭官が唱える］．その際，『火に対して，svā́hā』と［唱えてい］ない．次に，朝，『太陽が光である，光は太陽である，svā́hā』と［唱える］．その際，『太陽に対して，svā́hā』と［唱えてい］ない．」

このŚB の批判に応えて，VādhAnv は伝統的な祭詞を改作したと推測される[31]．新旧の祭詞を比較すると：［夕］agnír jyótir **jyótir agníḥ** → agnir jyotir **jyotir agnāv ādityaṁ**「火が光である，光である太陽を火に」；［朝］sū́ryo jyótir **jyótiḥ sū́ryaḥ** → sūryo jyotir **jyotis sūrye 'gniṁ**「太陽が光である，光である火を太陽に」．つまり，古い祭詞の最後の Nom. を Loc. に変え，Acc. を付け加えて，第 2 の jyotis を Acc. と再解釈する．また「太陽」を意味する語[32]に，もとの部分では sūrya-，付加部分では āditya-（VādhAnv の地の文と同じ）という不一致が見られる．

なぜ Vājasaneya に自派と対立する献供方式を主張させたか，その謎を解く鍵は JB I 23 における Vājasaneya = Yājñavalkya の発言に見出される：

satyam ity eva samrāḍ aham agnihotraṃ juhomi. tasmād ahaṃ satyam asmi… agnim upadiśann uvācedaṃ satyam ity. adas satyam ity ādityaṃ. **so 'ham adaḥ satyam asminn satye sāyaṃ juhomī-. ᵢdaṃ satyam amuṣmin satye prātar juhomy**…「他ならぬ真実（実在）であると［思って］，大王よ，私は agnihotra を献供する．それ故，私は真実（実在）を支配する（idam-bhū 構文）．… 火を指して言った，『これが真実（実在）である』と．『あれが真実（実在）である』と

太陽を［指して言った］.『そのように［知る］私は，あの真実を他ならぬこの真実に夕方，献供する．この真実をあの真実に朝，献供する…』と」．

JB I 22−25 は Janaka の五火説を含む議論 ŚB-M XI 6,2 (-K XIII 6,2) の簡略版であるが，ŚB 版の Yājñavalkya 説は上述の ŚB 本来の献供方式 (II 3,1,7ff.) を継承し，JB 版とは全く異なる[33]．火と太陽の相互献句方式は，ŚB 版では Śvetaketu と Somaśuṣma の 2 名に限られるが，JB 版では Janaka 王と Vājasaneya を含む 6 名全員に拡大する．改変された JB 版の Vājasaneya = Yājñavalkya の説が VādhAnv に取り入れられた可能性が高い．

以上を総合すると，VādhAnv は JB I 23 に従い Vājasaneya に彼本来の学説に反する献供方法を主張させると共に，ŚB II 3,1,36 の批判に応じて祭詞を改作したと推測される．VādhAnv が ŚB にも JB にも通暁していた状況が看取される．

更に VādhAnv の結論はこの説をも否定する．即座に天界を超えてしまい，二度とこの世に戻れないからである．天界における不死（再死からの解放）よりも，地上での繁栄と長寿を求め，agnihotra の目的に関し，より古い考え方を示している．

6. 【総括】Janaka の対話の原形は，戦闘や遠征のため通常の献供ができない王族階級の切実な問題を取り扱い，現実的な解決策を求めるもので，Vājasaneyin 派内部で成立したと思われる．ŚB-M, -K, JB はこれに Śloka を結び付け，呼吸という生命活動そのものが祭式行為に等しいという革新的な結論に導く．他方，VādhAnv は自派の TB の引用から出発して，agnihotra の供物の種類と効果，献供の方法という神学的議論の範囲に留まる．更に，agnihotra の目的を現世利益とする立場から Vājasaneya の教える献供方式を否定し，この点でも保守的性格が濃い．

VādhAnv の対話では，「供物が無いとき，どうするか」という現実的問題から，秘儀の伝授に重点が移り，供物の代替が導入部の伝統的議論に吸収され，対話本来の切迫感が失われている．最も古形を残す ŚB-M に比して，語形も内容も不自然な点が多く，特に「sat と asat による献供」，「太古の agnihotra」と「特殊な祭詞を伴う太陽と火の相互献供方式」に二次的な作為の痕跡が顕著である．

VādhAnv は結局，Vājasaneya の教説を否認し，自派の優越を示すために，Janaka と Vājasaneya の対話を意図的に改作して引用したと推測される．その根底には Vājasaneyin 派ないし ŚB への敵対的な競争心が窺われる．

AB: Aitareya-Br.; br., Br.: brāhmaṇa, Brāhmaṇa; JB: Jaiminīya-Br.; KB: Kauṣītaki-Br.; KS: Kāṭhaka-Saṁhitā; MS: Maitrāyaṇī Saṁhitā; ŚB: Śatapatha-Br., -K: Kāṇva; -M: Mādhyandina; TB: Tait-

tirīya-Br.; TS: Taittirīya-Saṁhitā; VādhAnv: Vādhūla-Śrautasūtra-Anvākhyāna

1)　筆者，Das Jenseit und…, "*Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik*"（Wiesbaden 2000）475–490, 今西順吉記念論集 862–882 参照.　2)　筆者「王族と Agnihotra」, 印仏研 53-2, 2006, 941–947 参照.　3)　agnihotra「火に献供すること」は祭式名と共にその供物をも意味する．aginihotráṃ juhoti「火への献供を献ずる」の Inhaltsakk. が直接目的語と解釈され「供物」の意味が生じたかと推測される．　4)　Taittirīya 派所属 Vādhūla 派の Br. 疑似文献；Ed. IKARI により全貌が明らかになる．→注 6.　5)　印度学宗教学会（2005 年東北大学）で口頭発表．論文は本稿続編として発表予定．　6)　Cf. CALAND, AcOr 4 (1926) 35, no.40 = Kl.Schr. 337; Ed. CHAUBEY, Hoshiarpur (2001) 2.12.　7)　idam は anu に支配され，直後に引用される諸学説（注 8, 15）を指す．　8)　TB II 1,5,1 brahmavādíno vadanti, agnihotráprāyaṇā yajñā́ḥ, kíṃprāyaṇam aginotrám íti. vatsó vā́ agnihotrásya prā́yaṇam. agnihotráṃ yajñā́nām. 訳文中 { } が省略されている部分.　9)　ソーマの献供は穀物祭 (iṣṭi-) である agnihotra になじまず，br. には無い（→ 注 15）．比較的新しい Śrautasūtra 以降に現れる：HirŚS III 7,114, ĀpŚS VI 15,1, BharŚS VI 14,15, VaikhŚS II 9 等（吉水清孝，インド学仏教学 16, 2001, 264 [90] 注 29 参照）.　10)　brahma-varcasá-, °-varcasín- の前肢は brahmán- (m.)「バラモン，祭官」ではなく bráhman- (nt.)「実現力を持つ神聖な言葉」と解される : cf. Atharvaveda (Śaunaka) XV 10,7–9 ayáṃ vā́ u agnír bráhmāsā́v ādityáḥ kṣatrám || áinaṃ bráhma gacchati brahmavarcasī́ bhavati || yáḥ pṛthivī́ṃ bṛhaspátim agníṃ bráhma véda ||「この（地上）の火が，他方，bráhman- (nt.) を管轄するのだ．あの（天の）太陽が支配権を［管轄する］．大地を，Bṛhaspati を，火を，bráhman-［を管轄する者］であると知っている者があれば，当の者に bráhman- は至る，［この者は］bráhman- の効力を持つ者となる」.

11)　西村直子，文化 64 (1/2)，2000，159–180 参照.　12)　玄米・玄麦・胡麻等と水から成り，牛乳を必要とせず，krūrá- である：cf. KS VI 3:52,12f., TS V 4,3,2, VI 2,5,2. HOFFMANN Aufs. II 480 "Körnermilchblei", n.2 "Milchspeise" は不適切.　13)　本来「放牧地を求めて家畜・家財と共に車両で移動する人々の群（移動と定住を繰り返す）」や「放牧地や家畜等の略奪に行く戦士集団」．遊牧生活から定住生活への移行に伴い「村落」の意味に転化（cf. RAU, Staat und Gesellschaft im alten Indien, 1957, 51–55）.　14)　grāmín- は王族・バラモン階級に属する grā́ma- の代表者であり，ヴァイシャ出身の村落の行政・軍事官僚 grāmaṇī́- から区別される（cf. RAU, aaO 55；注 13）.　15)　ソーマに関する部分（somena…brahmavarcasy eva bhavati: 注 9）以外は TB II 1,5,5–6 と一致 : 5. ā́jyena juhuyāt téjaskāmasya. téjo vā́ ā́jyam. tejasvy èvá bhavati. páyasā paśúkāmasyaitád vái paśūṇā́ṃ rūpaṃ. rūpénaivā́smai paśū́n áva rundhe. 6. paśumā́n evá bhavati. dadhnéndriyákāmasya. indryáṃ vā́i dádhi. indriyā́vy èvá bhavati. yavāgvā̀ grā́makāmasyauṣadhā́ vā́i manuṣyā̀ḥ. bhāgadhéyenaivā́smai sajātā́n ávarundhe. grāmy èvá bhavati.　16)　永ノ尾信悟，国立民族学博物館研究報告 9 (3), 1984, 524f., n.10; MSS 44, 1985, 18f. 参照.　17)　動詞の複数形に注意；agnihotra は祭官 1 名で行う；複数形は多数の祭官の慣行を表すか．Ed. IKARI, Ed. CHAUBEY に異読なし；Ed. CALAND には欠如.　18)「自分自身を賢者を超えた者と思っている」と解し，次の「これら…献供された」から切り離す事も可能であるが，第 2 文が文脈から浮き上がり，前後の文意が繋がらない.　19)　Ed. IKARI (= K_1, k_4), Ed. CHAUBEY ahūyata iva

(<ahūyate + iva) は augment と ind. 語尾とが両立不可能，Ed. CALAND āhūyata iva (< āhūyate + iva) の現在形は文脈に合わない．ŚB(M) = (K) **áhūyataivá** (2. 参照) 同様，**ahūyataiva** (< ahūyata + eva) が本来と考えられる．伝承過程における **-ai-** と **-a i-** の交替は珍しくなく，JB にも同様の現象が見られる．注 22 参照．　20) 文末の iti は，manyate の目的文 (purā … ahūyata iva) を導くと同時に，V の発言全体を締めくくる．iti は重複して用いられる事はない．　21) 全 Mss. **vividuṣāṇi** (i の 3 連続からの dissimilation) ; CALAND は **vividiṣāṇi** に訂正し，IKARI, CHAUBEY もこれによる ; BODEWITZ, Agnihotra, p.189 n.6 は ind. **vividiṣāmi** への訂正を示唆．**vividiṣāṇi** は ChāndUp I 11,1，Niruktia II 8 でも会話文中に現れる．意欲の客観的叙述には deisid. ind. vividiṣāmi「私は知りたい」で十分であるが，会話における主語＝話者の強い意欲を強調するために，desid. と subj. の重複表現が口語において形成されたと推測される．堂山『リグヴェーダにおける 1 人称接続法の研究』(大阪大学大学院文学研究科紀要 45-2, 2005) 64ff. によると主文・主節 (非疑問文) における 1 人称接続法は「一方的発言としての意思表明」ないし「見込み」を表すが，当該箇所では「話し相手に対する懇願的な意思表明」である．TICHY, *Der Konjunktiv und seine Nachbarkategorien*, Bremen 2006, 89 によると MS では直接話法に desid. の用例が無く，当該機能は opt. で表現される．　22) Ed. IKARI (全 Mss.), Ed. CHAUBEY ahūyeta; Ed. CALAND ahūyata (注 : āhūyeta?)．augment 付き opt. は過去に関する推測を表す (T.GOTŌ, Fs. Mette, 2000, 267f., n.37f.)．先行文の確信的表現 ipf. ahūyata + eva (注 19) と対照的．　23) Ed. CALAND, Ed. CHAUBEY では該当部分の写本欠落．　24) Ed. CALAND, Ed. CHAUBEY では sūryo (Nom.); v.l. 無し．　25) Vājasaneya の返答はここで終了し，重複する iti が省略されている (注 20)．　26) opt. abhi + as "darübersein, übertreffen, beherrschen, bewältigen". 天界を超えて向こう側まで行ってしまい，もはやこの世に戻れない (死亡)．abhi + as の用例は RV・AV 以外では稀．　27) Purūravas と Urvaśī: cf. 後藤敏文，御子上恵生記念論集，2004, 853ff; Fs.Narten, 2000, 97f.　28) DELBRÜCK 210 は imā́m との対比で asáu, amúm を「天」とするが，パラレル KS 参照．　29) Cf. Ṛgveda X 88,6 ab mūrdhā́ bhuvó bhavati náktam agnís | tátaḥ sū́ryo jāyate prātár udyán「火は夜の間，存在の頂点 (頭頂) となる．そこから太陽が朝，昇りつつ誕生する」．　30) ŚB-K I 3,1,24f. tád āhuḥ | **agním** evàité sāyā́ṃ **sū́rye** júhvati. **sū́ryaṃ** prātár **agnā́v** íti… 太陽と火の関係が ŚB-M および他文献と逆である．K の伝承過程での損傷であろう．　31) TB II 1,2,10 (上記 5.2.) も同様の献供方式に関し，火と太陽の争いを避けるために祭詞の変更を指示する : agnír jyótir jyótiḥ sū́ryaḥ svā́hā; sū́ryo ... agníḥ ...　32) 時代と共に sū́rya- から ādityá- に移行 ; 本稿では sū́rya-: RV X 88,6 (注 29)，ŚB-M II 3,1,1ff. (6.)，KS VII 4:66,1 (5.1.)．　33) Janaka の五火説を含む議論 : 筆者 "Zur Entstehung der Fünf-Feuer-Lehre des Königs Janaka", Akt.27.DOT (2001) 157−167; "*kathám-katham agnihotrám juhutha*", Fs. Narten (2000) 231−252.

〈キーワード〉 agnihotra, Janaka, Yājñavalkya, Vājasaneya, Vādhūla-Anvākhyāna, Śatapatha-Brāhmaṇa, Jaiminīya-Brāhmaṇa

(元大阪市立大学助教授，パリ第 3 大学課程博士)